



話題の本棚

村山由佳著『PRIZE—プライズ—』

スティーブン・キング著、白石朗訳『フェアリー・テイル(上)(下)』

特集／語学書

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



univ.

京大生協

CO-OP 綴葉編集委員会

直木賞受賞作家による珠玉の「直木賞」ドラマ！

PRIZE —プライズ—

村山由佳著

文藝春秋



朝井リョウの『何者』は史上最年少の受賞で大きな脚光を浴びた。少し遅れば池井戸潤の『下町ロケット』や東野圭吾の『容疑者Xの献身』に、最近でいえば万城目学の『八月の御所グラウンド』。

これらの共通点といえば、直木賞。純文学作品を対象とする芥川賞に対して、直木賞には大衆文学の最高峰が選ばれる——本書に言わせれば「人ひとりの人生を変えてしまう賞」だ。

本作の主人公である天羽カインは映像化作品を多数抱えるベストセラー作家にして、作品作りにもそれを語るに届けることにも一切の妥協がない。数々の文学賞を受賞している彼女だが、直木賞には度々ノミネートされるもあと一步、受賞にまでは至らない。なぜ。一体なぜ評価されないのか。彼女には何が足りないのか——直木賞というPRIZEの重みがずしりとカインの肩にのしかかる。

■「本を作ること」を作ること

幾人もの作家・編集者・出版関係者が登場する本書は、まさに「本を作ること」をめぐる物語だ。特筆すべきは直木賞の選考過程やサイン会の裏側がリアルすぎるほどに語られる点……だが、本作の凄みはそんな裏話的な面白さだけでない。それを軸として展開するドラマの巧みさにある。直木賞を狙うカインの気迫、作家と対峙

する編集者の覚悟、作品を評する選考委員の思考。生々しい視点的交錯が織りなすドラマは、まさに一流のエンターテインメントだ。

そして村山自身もまた直木賞作家（二〇〇三年『星々の舟』）であるわけだが、「本を作ること」という彼女にとってリアルなテーマを乗りこなすその技術の高さには唖らされるものがあった。若手の野心とベテランの矜持のぶつかり合い、一癖二癖あるのに共感してしまふ憎めない登場人物たち、そしてカイン執筆の作中作をめぐる編集者との応酬。村山の掌上に運られるままに高まる緊張と高揚は凄まじく、その面白さに慄いてしまった。本作こそがPRIZEに値するのではないかと、思うほどに。

■欲望と仕事と生きること

「欲するだけの評価を受けられないまま」と、いつも誰かに嘔われている気がする。わかりやすい値打ちの勲章を手にいれ、嘔った奴らをぎゃふんと言わせてやりたい。「こうした欲望は汚らしいものだろうか」。否。評者もまたとにかく良いものを作りたい、それを認めてもらいたいという思いを強烈に持ち合わせている人間だ。『ダブル・ファンタジー』（文春文庫）で女性の性的衝動の煌めきをリアルに描いた村山の筆致は、欲望を否定するでもなく、その渦のなかで生きざるを得ない人間の業と生き様をよく捉えている。読み終えた後、己の欲望を費に仕事を進めていくカインのひたむきさに心を打たれてしまった。

カインは果たして直木賞を獲得することができるのか——その結末はあなたの目で確かめてほしい。

（浅煎り）

（二八四頁 税込二二〇〇円 1月刊）

先の見えない最低の時代に、最高のフェアリー・テイルを

フェアリー・テイル

(上)(下)

スティーン・キング著

白石朗訳 文藝春秋



作家生活50年を迎えた最高のストーリーテラーであるスティーン・キングが紡ぐのは、『フェアリー・テイル』——そう、おとぎ話。子供時代に誰もが親しんだ様々なおとぎ話からパッチワークのように編み上げられる、一人の少年と一匹の犬の壮大な冒険譚だ。

事故で母を亡くし、アルコール依存症と闘う父と二人で暮らす少年チャーリー。近所に住む不気味な家「サイコ・ハウス」に隠遁する偏屈な老人ボウウィッチの命を偶然にも助け、老いさらばえた彼の愛犬レイダーの世話を引き受けたことから、二人(と一匹)の奇妙な交流が始まる。そうして次第に打ち解け合うなかで、老人の抱える不可解な謎——金庫の中にある黄金でいっぱいのかげつと、不気味な生き物の気配がする小屋——がチャーリーを未知の世界へと手繰り寄せてゆく。母の死の記憶、過去を克服しようとする父の姿、そして奇妙な老人との交流、これらが絡み合いながらゆっくりと物語の幽車が動いてゆく前半部はまさにキング流。

そして謎めいた老人の秘密が明かされたとき、物語は急速に加速してゆく。彼の遺した手がかりに従って、チャーリーはある決意を胸に、異世界に足を踏み入れるのだ。

*

おとぎ話の本質とは何だろうか。魔法の世界、呪いをかけられたお姫さま、ちょっぴり残酷でこわい目にも遭うけれど、その末に至るハッピーエンド……。閉塞的であろうにもならない現実にあって、救いを夢見る物語。つまりそれは、願いと希望の物語。

『エンピス』と呼ばれる異界で目にするのは、王国を篡奪した闇の勢力と、呪いにかかれた人々の姿——そう、おとぎ話に呪いはつきものだ。けれどまた、呪いとは解かれるものである(たとえその手段が王子様のキスではなかったとしても)。呪いというおとぎ話の必須項目は、逆説的に、解呪という希望への道しるべとなる。

死者の勢力との闘いや、彼らを打倒する主人公らの機転、これらは初期作品から通じるキングの醍醐味だし、その末に邂逅するラウクラフト流の恐怖もまた最高だ。けれど本作の力点は、恐怖を描くことにはない。暗い世界に輝く一点の光、全てを喪いながらも、「それでも」と希望という名の星の銀貨に手を伸ばす、その威容、その尊さである。地下牢の中で少年は思う、『希望は羽の生えた生き物だ。《たとえ囚われている人のためにも希望は飛ぶことができる。いや、囚われている人のためにこそ飛ぶのかも知れない。》』陰惨な現実には倦み疲れ、希望を語ることも忘れてしまった我々は、まさしく呪いをかけられた灰色の民ではないか、そう思わずにはいられない。ハッピーエンドを望んだっていい、そんな風に背中を押してくれる何かが必要なのかもしれない。——先の見えない閉塞的な空気に包まれたこの時代に、空を見上げることを忘れてしまわぬようにと、『フェアリー・テイル』は力強く訴えかける。

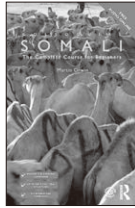
(猫足)

(二一八頁 税込四六七五円 4月刊)

Colloquial Somali

Martin Orwin 著
Routledge

いきなりで恐縮だが、みなさんはソマリ語をご存じだろうか？ 知っていたら相当の言語マニアだ。ソマリ語を勉強する物好きなど、日本におそらく片手指ほどしかないだろうから。

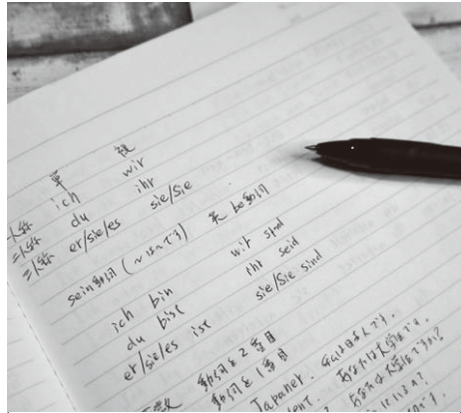


ソマリ語は、主にアフリカ北東部の国ソマリアで話される言語だ。記録では13世紀から現地の人々が文字化してきたが、他のアフリカ諸国と同様、19世紀末に西欧諸国に植民地化された影響で独立後しばらく公用語が英語とイタリア語だった。その後軍事クーデタで政権を掌握した独裁者シアド・バーレによって、1972年にソマリ語が公用語となった。本書は、そんな数奇な運命を辿ってきたソマリ語の初学者向けの数少ない語学書の一つだ。

ビビらせるようで申し訳ないけども、ソマリ語はとにかく難しい。例えば日本語の「と」にあたる接続詞は三つある。また、日本語の「～は／が」にあたる強調の品詞は四種類あり、それぞれ微妙に使い方が違う。さらに複数形の作り方にも七種類あり、数を示す際には名詞は単数形になり、しかも定冠詞は数字の方に付き……などなど。細かい文法事項を抜き出すとキリがないが、とにかくソマリ語の文法は「何でそうなるの？」の連続なのだ。

このソマリ語の面妖さに直面した著者のオーウィン本人も説明に苦しんでいるのが、本書の書き方からも見て取れる。「法類別子」という独自の造語でソマリ語の強調構文を説明したり、後ろに行くごとに規則の例外が増えたり、語学書なのにやたら言語学的に突っ込んだ説明をしたり……初学者が混乱するほどに、微に入り細を穿ってソマリ語の文法を説明している。それほどにソマリ語は奥が深いのだ。ぜひ勉強してみよう。（倉井）

（304頁 税込 6757円）



特集

語学書

夏休みまでのカウントダウンが始まった。
長い長い自由時間、さあどこへ行こうか。

ものすごく遠くまで行く手段が一つある。
今月号の特集は、その道先案内。

（ひる）

しっかり学ぶ 初級古典ギリシャ語

堀川宏著 ベレ出版

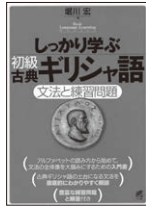
α (あるふぁ)、 β (べーた)、 γ (がんま)。文字も読み方にも見覚えはあるけれど、「古典ギリシャ語」と言われるとなんだか仰々しくて難しそうに感じる。しかも「古典」を冠しているのだからなおさら偉そうだ。

本書はそんな古典ギリシャ語の初級文法を、講義のような語り口で丁寧に解説してくれる。いまあなたが勉強を始めようと思ったら、価格、入手しやすさ、それにももちろん内容の面でも、率直に言って最もおすすめしたい一冊だ。一度チャレンジしたけれど挫折してしまった、という人が学び直す際にも文法事項の詳しい説明は大いに助けとなってくれる。しかも、こういった古典語の教材には解答解説が付いていないことも多いのだが、その辺りもしっかりカバーしている。

古典ギリシャ語は簡単だ、というのは流石にはばかれるけれども、(少なくとも個人的な意見では) 一般に思われているほどは難しくない。格変化の数は基本的にはドイツ語と同じだし、法の数もフランス語等と変わらない。冠詞や関係代名詞などの概念も、印欧語に触れたことのある人ならば(ほとんどの人は英語を学習したはず)、それほど馴染みにくいものでもない。それに、ギリシャアルファベットもある程度は見慣れているはずだ。発音も基本的にはアルファベット通りに読むだけでよい。こう書くと、イケそうでは？

最初に α (あるふぁ)と書いたが、元々の発音は「あるば」の方が近い。発音に関して言えば、(新刊)でも紹介するプラトンは正確には「プラトーン」(ラにアクセントを置く)だ。こういった小さな知識から、一步步古代ギリシャへと近づいてみては。(荒砥)

(320頁 税込2750円)



ことばの哲学 関口存男のこと

池内紀著 青土社

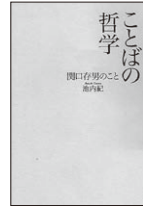
関口存男。ドイツ語を本気でモノにしようと思うなら、必ず一度はその名を目にするであろう伝説のドイツ語学者。本書は「語学の鬼」と呼ばれた関口をめぐる初の伝記である。「ある人物の伝記をつづろうと思う。一般には『語学者』といわれるタイプの人だった。ふつうの語学者であれば伝記をつづるまでもない。あきらかにこの人はふつうではなかった。」

では、関口の何が「ふつう」ではなかったのか。それはその仕事の膨大さと壮大さである。関口の死後に編まれた著作集は全二十三巻。これだけでも圧倒されるが、関口が本当に心血を注いだ仕事はこの著作集に含まれていない。その仕事とは全三巻の『冠詞』である。突然の死によって未完に終わった著作だが、それでもその頁数は計二三〇一頁に及ぶ。ドイツ語の冠詞についてだけで、である。

関口は勉強法も凄まじい。ドイツ語をモノにしてやると決心した関口少年は、「とにかくぶ厚い本を買って、それを全部読破すればドイツ語ができるようになる」という考えのもと、ドストエフスキー『罪と罰』のドイツ語版を購入した。当然最初は何もわからない。しかし彼は諦めない。本がボロボロになってもお構いなし。とにかく同じ文章を数十回も読み返す。おのずと暗記してしまうほどにまで。するとあるとき、不思議なことに「なんだかわかり出したような気がした」。だから関口は言う。語学は長文の暗記に尽きると。

正直、本書を読んでもドイツ語ができるようにはならない。本書は伝記であって語学書ではないからだ。しかし本書を通じて関口の語学への熱意に触れると、どうしようもなく語学を勉強したくなる。それがいい。(ばや)

(225頁 税込1980円)



新版 ウェールズ語の基本 入門から会話まで

永田喜文／小池剛史著 三修社

実は今年の3月に本邦初の『ウェールズ語辞典』が出版された。そして〈新版〉を冠する本書は、辞典に先立つことひと月、今年の2月に改訂されたばかりである。ブリテン島で英語が話されるよりも昔からこの地で話されてきたウェールズ語が今再び盛り上がっている！

さて、本書の良いところは外国語学習における〈会話〉の位置付けである。書名の〈入門から会話まで〉から察せられるのは、会話とは入門レベルから学習を積み重ねた先にあるものだというスタンス。会話をするには文法学習と反復練習が重要であると伝える構成だ。本書冒頭の記述にも注目したい。同じ内容であってもくだけた口語体か書き言葉に近い文体かで大きく異なるこの言語。本書が採用するのは、現地でそのまま使うと「随分丁寧ですね（丁寧すぎますね）」と言われてしまうかもしれない文体だという。だがこの丁寧な文体をマスターすべきだと断言している。口語体は後から身につくと。読者の目指すところが何であれ最初の一冊として信頼できる。

とはいえ会話が意識されていることは練習問題からわかる。各課で学んだ構文を骨組みにして、語を入替えることで様々な文を作る練習が各10題ずつほど用意されている。さらに解答にも音声がついているのが嬉しいところ。『指輪物語』の著者・トルキン^{トルキン}は、この言語の音をとりわけ好んだという。豊富な音声教材で語の響きを楽しむのも一つである。

最後に、*Wales* という語はそもそも侵略者であるアングロ・サクソン人の言語^{ウェールズ語}でよそ者を意味する語であった。この言語自身のことばでは *Cymru*^{カムリ}（同胞・仲間）という。さあ、これで出発点に立ったも同然だ。（ひるね）

（316頁 税込4180円）

実例が語る前置詞

平沢慎也著
くろしお出版

京大入試を突破してきた読者諸賢なら、英語文法には自信がおりのことと存じ上げるが、前置詞には苦労した経験をお持ちなのではなかろうか？ そんな「難関大学受験レベルの語彙と文法をしっかりおさえているはずなのに、前置詞を上手に使いこなせない」英語学習者に向けたうってつけの一冊が、本書である。

前置詞を学ぶとき、*at* は点で、*on* は面への接地で……というように、前置詞を空間イメージで捉えて様々な用法に適用してゆく、つまり抽象的な知識から個々の具体へ演繹するようにして学んだのではないだろうか。だが日本語で「治安がいい」と言うとき、「治安（地域の安全性）」「が（主格の格助詞）」「良い（状態を表す）」という語を組み合わせるわけではない。「治安がいい」とか「治安を守る」といった言い回し（具体的知識）の蓄積から、「治安」という語をイメージしているのである。重要なのは抽象知識からの演繹よりも、アーカイヴとしての具体の蓄積なのだ。

そこで本書は「具体から抽象を抽出する」という帰納的態度を徹底する。小説や映画、ドラマから膨大な実例を並べ、チャンク（よく使われる語のまとまり）に注目して前置詞の用法を引き出してゆくのである。これは、コーパスの膨大な言語実践から言語の仕組みを指定する言語学的態度の応用といえるだろう。じじつ、著者は認知言語学者であり、専門知に裏打ちされた本文には思わず膝を打つ。また註やコラムでは、先行研究の紹介や、言語学に一步踏み込んだ Tips が盛り込まれていて、読み物としても面白い。

この夏は、語学学習として前置詞に向き合ってみるのも悪くないだろう。（猫足）

（348頁 税込2750円）



尹東柱詩集 空と風と星と詩

金時鐘編訳 岩波文庫

隣国の言葉、ハングル。韓流ドラマやK-POPの流行で日本でずいぶん身近になった——のだが、少し別の角度からその豊かな世界をのぞいてみよう。

ユン ドンジュ
悲哀の詩人・尹東柱

(1917-45)。京都の地でハングルを学ぼうと思えば、彼の短い生涯と美しい詩の律動が思い起こされる。満州出身にして同志社の英文科に入学した彼は、左京区田中高原町（元・造形大のキャンパス内）に下宿していた。しかし1943年、彼は独立運動の容疑で下鴨警察署に逮捕され、27歳の若さで獄死する。「死ぬ日まで天を仰ぎ、一点の恥じ入ることもないことを」——大戦の空気張り詰める時代の日陰の、澄み切った水のようなその抒情の発露。その序詞から一節を逐語訳的に示そう。

오늘밤에도 별이 바람에 스치운다

今夜も星が風に掠れている

実は韓国語と日本語は言語的によく似ている。ともにSOV構造でよく似た助詞を持ち（下線部が相応）、ハングル化されたため一見気づきにくいのが、漢字由来の共通語彙もかなり多い。日本語話者にとって最もハードルが低い（感覚的に体得しやすい）言語だと思う。どうだろう、彼の原詩の美しさに直接触れられると思えば、心躍らないだろうか。

初学者には『ゼロからしっかり学べる！韓国語【文法】トレーニング』（高橋書店）がおすすめだ。評者もお世話になったが、とにかくシンプルで学びやすいレイアウト。イラストで解説をぐまかされることもなく、十分な練習問題付き。独学にも耐える正統派だ。新たな言葉を学び続けるというのは地道な作業だけれど、そこから広がる世界の美しさと思えば、その道のりすらも楽しい。（浅煎り）
(192頁 税込692円)

ニューエクスプレスプラス ウルドゥー語

萩田博、萬宮健策著 白水社

アッサラーム・アライクム。直訳すると「あなたに平安がありますように」となるこの語は、イスラーム文化圏における挨拶として使われるアラビア語である。話者の多くがムスリムであるウルドゥー語でもこの語が挨拶として使われる。そして、ワーライクム・アッサラームと返答するのだ。

そもそもウルドゥー語ってなんなのか、疑問に思う人も多いだろう。ウルドゥー語とは、パキスタンやバングラデシュを中心とする南アジアで広く話される言語である。口語はヒンディー語とほとんど同じものの、書くときにはアラビア文字を用いる（ヒンディー語がデーヴァナーガリー表記）。ウルドゥーはトルコ語で「軍の駐屯地」という意味を持つが、特定の地域や国の名前ではないため、誰が話しているのか想像することが難しい。

『ニューエクスプレス ウルドゥー語』は、様々な言語のはじめの一步を助けるニューエクスプレスシリーズの一冊であり、初学者にうってつけの学習書である。アラビア文字から始まり、会話文を中心に全20章の中で文法事項を学んでいく。それぞれの章に新出単語リストがついており、会話例文の音声データがダウンロードできる。2章ごとに練習問題が設けられていることなども含めて、本書には初学者に易しい様々な仕掛けがある。

あまり知られていないが、世界人口の約4億人が話すウルドゥー語。これを勉強すればヒンディー語話者とも話せるようになることを加味すると、習得することのでかなり多くの人と会話を楽しむことができるようになる。ウルドゥー語を新たに学ぶ言語の候補に入れてみるのはいかがだろうか。（プラチ）

(163頁 税込3740円)



新刊コーナー

夜間飛行：人間の大地

サン・テグジュペリ著

野崎欽訳
岩波文庫

『星の王子さま』の著者であるサン・テグジュペリが飛行士であったことはよく知られる。むしろ彼の作家としての本領は、その職業から生まれた作品のほうにこそあるだろう。本書はその代表例である小説『夜間飛行』とエッセイ集『人間の大地』を新訳し、合本した一冊だ。どちらにおいても困難な航行に挑む飛行士たちや、彼らをとりまく人びとを通じて、生きる意味、人間の使命が問われている。《人間の命には値段のつけようがないほどの価値があるにせよ、われわれはいつだって、人間の命にまさる価値をもつ何かがあるかのように行動しているんじゃないか……。それはいったい何なのだろう？》

嵐の夜や砂漠を生き抜くための、危機を乗り越える思想——サン・テグジュペリの描くそれはヒロイズムに漸近し、ときには自然や人間に対する征服・支配を肯定する。植民地

に対する彼の眼差しは無邪気すぎるほどだ。しかしそれでもなお、仲間と手を取り、同じ方向を見つめ、分断を乗り越えようとする彼の言葉は、時代を超えて切々と響く。《なぜ憎みあうのか？ 同じ惑星によって運ばれ、同じ船の乗組員であるわれわれは運命をともにしている。諸文明が対立しあうのは、「……互いをむさばり食らうなど言語道断だ》。

本書に描かれる飛行士たちと同じく、われわれもまた岸辺のない嵐の夜を往くことを強いられている。本書はそんな旅路にあって、ひとつの道標となるはずだ。（水炊き）

(四〇四頁 税込二二二円 5月刊)

絵本戦争

禁書されるアメリカの未来

堂本かおる著

太田出版



絵本戦争

いまアメリカでは「子どもにふさわしくない」として絵本が次々と学校や図書館から排除されている。本書は、そうした禁書運動の標的となった絵本の数々を取り上げながら、その背景にある社会の分断を描き出す。紹介されるのは黒人の家族やLGBTQの親

子、先住民の食文化、イスラム教徒の暮らしなど、多様な経験や文化を伝える絵本たちだ。こうした禁書運動の中心にあるのが、保守系の保護者団体「Moms for Liberty（自由を求める母たち）」だ。彼女たちは「子どもに何を教えるかは親が決めるべきだ」と訴えている。多様な文化や価値観に触れることで子どもが混乱するとして、人種問題、性教育などに関する本を問題視し、教育現場から排除してきた。

たとえば『Hair Love』は、黒人の父親が娘の髪を整える様子を描いた親子の物語だ。その背景には、黒人の髪が白人社会の規範にそぐわない「民族的すぎる」ものとされ、理不尽な扱いを受けてきた歴史がある。描かれているのは、何気ない行為のなかで育まれる親子の信頼と愛情であり、継承されてきた黒人コミュニティの誇りと文化の豊かさである。しかしこうした本は「白人の子どもが罪悪感を持つ」という理由で禁書にされているのだ。

本書はただ絶望を伝えるだけではない。禁書にされた著者を招くポッドキャストや、若者が自らの言葉で表現を守ろうとする草の根の活動など、対抗の動きにも光が当てられている。作品の力を恐れるとき、人はそれを禁じようとする。その一冊二冊には、社会を揺り動かす力が確かに宿っている。（たいやき）

(二一八頁 税込三七四〇円 1月刊)

もしも恐竜と遭遇したら

ジョシュア・ペイビン／
デビット・ボーゲンクト著
梅澤乃奈訳 文響社

目を引くタイトルである。とうの昔に絶滅しているだろう。そんなことを考える



必要はないと思うが、考えてみたくなるのも事実である。訳の分からない状況に遭遇したときに生き延びる術を心得ておけば、現実世界に応用できるのではないか。ゲームの攻略本のような感覚で手に取ってみた。

様々に想定された状況への対策がまとめられている。早速一番気になる「もしも恐竜と遭遇したら」の項目を見てみよう。例えばティラノサウルスなどの二足歩行動物から逃げる場合は、石や岩が露出したでこぼこ道に逃げ、洞窟や裂け目などの狭い場所に避難する。重い体で二足歩行する動物にとって転倒は致命的なので不安定な足場は避けるらしい。他にも、宇宙人が攻めてきたらとか、ネアンデルタール人と友達になりたかったらとか、SF映画のテーマになりそうな項目が並ぶ。様々な専門家の知見のもと、ただのファンタジーに終わらない説明がなされている。

そして本書の魅力はそういった面白さだけではない。津波や噴火、パンデミックなど、いつ起こってもおかしくない大災害への対策も載っている。もしも今この瞬間に津波警報が発令されたら、近くにある火山が大噴火を起こしたら、生き延びるための行動を瞬時に判断できるだろうか。

絶対出会わないような「もしも」から今日にでも起こりうる「もしも」まで、気になる「もしも」がぎっしりとあるはず。楽しいだけではなくいざという時の救世主になるかもしれない。

(二六四頁 税込一八四八円 5月刊)

(竹輪)

祭りと言の怖い話

月の砂漠著
竹書房怪談文庫



トイレの花子さんなどの都市伝説から、河童や座敷童などの民俗的な話まで、所謂「怪談話」と言われるものは、子どもの頃に聴きなじんだのではないだろうか。本書は、日本各地における祭りや伝承などにまつわる三十八編の短編から成る怪談集である。

そのおもしろきは、各話がそれぞれ民俗的な伝承や実践に結び付いていることである。隅田川の花火大会と火にまつわる信仰、山岳信仰に基づく入山禁忌日、秋田県のナマハゲにまつわる実践。話の基盤となっている民俗的風習や信仰について、各話の冒頭で詳しく説明される。その後、個人の体験談形式で各話が展開される。民俗学的にも非常に興味深くそれぞれの話が読めるのである。

実話怪談形式……これがもう一つのポイントである。すべての話が、該当する伝承地域の人にインタビューをとったかのように描かれている。これが完全なノンフィクションではないことは、すべての話がきれいに完結することからすぐにわかる。しかし、年寄りの語る昔話から自分と同じ年代の人が経験するような話まで、すべての話に没入感がある。フィクションとノンフィクションの良いところを取り入れたような構成なのだ。

怪談として語られる現象の原因を突き止めて解決する話から、現象の理由や意味することがわからない後味の悪い話まで、そのすべてが「怪談っぽく」描かれる。しかし、民俗的な話とつながっているからか、怖さ以上に生々さと表象できる既視感を感じる、新たな感情になれる怪談である。

(二三四頁 税込八〇三元 3月刊)

ある作家の夕刻

スコット・フィッツジェラルド著

村上春樹編 村上春樹訳

中央公論新社

もちろんすべての

人生は崩壊の過程であるわけだが（壊れる）、フィッツジ

ェラルドは決して、それをただの悲惨にはしなかった。二〇年代の奢侈と放埒のあとの、タクシードアの悪夢に向けて開かれた（ひとの犯す過ち）あとの、早すぎる夕刻。その三〇年代に書きつがれた短編小説とエッセイを集めた本書は、彼の闊いのなにより証拠になるだろう。

いや、むしろ、迫り来る夜の気配ゆえこそ、彼が描き出す、かつて一度は手にしたと信じた希望の姿——ある晴れた朝の記憶——は比類のない光を放つ。『ギャツビー』の最後を思い出してみたい。あの輝き。

小説の言葉が作家の感慨と混同する愚を覚えて犯して、いくつか引いてみよう。例えば彼には、すべての瞬間が数え切れないほどの可能性の萌芽をそなえていた（…）不可能なものはなにひとつとしてなかった——すべてはまだ始まったばかりだ（クレイジー・サ



ンデー）と思えた瞬間があったのだ。そして、ある主人公は道ゆく少女たちを眺めてこう思う——彼女たちには計画もなく葛藤もなく、あるのはただ甘美な未決の状態だけだった。それは挑発的であり、また静謐でもある。彼は少しのあいだ人生を心から愛した。（ある作家の午後）。

重力に引かれて、地面すれすれを飛んでいるように見えるのがこの作品集の時期の彼かもしれない。しかしそれでも飛び続ける事をやめはしないし、彼の翼は、夕陽を浴びて、魔法のような輝きを放っている。（コーク）

（四〇八頁 税込一六五〇円 3月刊）

半生「はんせい」の絆

張愛玲著
濱田麻矢訳
早川書房



「彼女にはほんの少しも変わってほしくない」。この愛が永遠に続くと思じて

疑わない、愚かしくも甘い祈り。少しも変わらないうちに死んであるはずない。けれど、運命はここまで残酷なものだろうか。「半生の絆」は、一生ぶん続くことは叶わなかったラ

ブストーリーだ。

作者・張愛玲は日本ではあまりなじみがないかもしれないが、魯迅にならんで愛される中国きっての恋愛小説家。彼女が活躍した民国期の中国は、伝統と近代のはざまで揺れていた。主人公の世鈞は出世を夢見て保守的な実家を飛び出す、父親の病気を期に連れ戻される。仕事だけではなく、結婚も「家」に縛られる。「一番腹が立ったのは、母親の口ぶりが、まるで年長者同士で次の世代の縁談を仕切っているようだったことだ」。

結婚は必ずしも思い合うふたりのゴールとはかぎらない。本妻を差し置いて遊び歩く夫。子どものために喧嘩する毎日。心に秘めた恋人を忘れるための結婚。さまざまな思惑がからまり、運命は思わぬ方向に転がり、それでも生活は続いていく。

「世鈞は罪の前に立ち、こんな気持ちでは人ごみの中に入っていくことはできない」と思った。あまりにも幸せすぎる。（……）世鈞には知る由もなかった。曼楨との一番幸せな時間は期待のなかに過ぎてゆくだけで、彼らには日曜日の朝は永遠にやってこないのだということを。それでもページをめくる手を止めることはできない。時間を止めることができるのと同じように。（くたくた）

（六四〇頁 税込一八九二円 3月刊）

プラトンの プラトニック・ラブ

國方栄二著
京都大学出版会

プラトニックな恋

愛——いかがわしい
ことは抜きで、清純
な理想的関係——？



「プラトニック」という形容詞は「プラトンの」という意味だが、現在では「恋愛」の枕言葉になってしまっている。しかし、プラトンが説いたエロス（恋）が指しているのは、私たちが想像するものとは異なっている。

本書はプラトンの代表的著作である『饗宴』『パイドロス』を中心として、プラトンが論じたエロスとはいかなるものであったのかを探る。しかしながら、エロスの実態を知るには、プラトンの他の重要な思想——魂の不死と輪廻転生、狂気の四つの分類——をも知る必要がある。彼の説くエロスは肉体ではなく魂に関わるものであり、ある種の狂気、それも神がかりの狂気とされる。

本書は一般向けの書籍ではあるが、随所に専門的な議論が登場する。ここでプラトンが言わんとしていることは何か？ この議論は他の箇所と矛盾しているのではないか？ そ

んな疑問を解きはぐしながら読み進めると、ギリシア哲学の何たるかを感じることができ。古典ギリシア語の知識が必要になる場合もあるが、そんな時は〈特集〉を参考に。

プラトンの説くエロスは、確かに「いかがわしい」ものに重きを置かない。ただ、それが目指しているのは単なる清純な恋愛関係ではなく、より形而上的な、哲学的営為である。思い返してみれば、知 (sophia) を「愛する」(phileo) ことこそが哲学 (philosophy) と呼ばれていたのであった。プラトニック・ラブとはまさに知への恋、とも言える。（荒砥）

（二四三頁 税込二二〇〇円 4月刊）

石原吉郎

シベリア抑留詩人の生と詩

細見和之著

中公文庫



石原吉郎という詩人がいる。一九四五年の敗戦後、シベリアに抑留され、極寒

の地で過酷な労働に従事した石原は、それから八年後の一九五三年、日本に帰国した。この体験ゆえに彼は「シベリア抑留詩人」と一般に呼ばれる。現在では詩人というより、一

連のシベリア・エッセイの書き手として知られる石原だが、彼が帰国後、まずもって書き始めたのはエッセイではなく詩だった。詩人でもある著者は「石原の真髄は詩にある」という主張のもと、現代詩の世界で孤独に屹立する石原の詩を丹念に読み解いていく。

石原の初期代表作に「位置」がある。一部を引用しよう。「しずかな肩には／声だけがならぶのでない／声よりも近く／敵がならぶのだ／（…）／無防備の空がついに攪み／正午の弓となる位置で／君は呼吸し／かつ挨拶せよ／君の位置からの／それが／最もすぐれた姿勢である」。この詩はシベリア体験に直接取材したわけではないが、著者曰く「記憶の主体として言葉が存在しており、その言葉がシベリア抑留を想起している」。石原ではなく言葉がシベリアを記憶している——それが著者の主張である。石原の詩において、主体は石原ではなく言葉なのである。それゆえ著者は言う。「記憶としての言葉の、ほとんど無意識的（非意図的）な内在的展開、そこに石原の詩の特異性はあると」。

本書は「石原論」の姿を借りた「言語論」でもあると私は思う。ベンヤミンの言語哲学にも精通した著者は、石原の詩を通じて、言語の秘密に深く分け入っている。（はや）

（四七二頁 税込二六五〇円 3月刊）

文章に生きる

チーホフとエスノグラフィを書く

キリン・ナラヤン著

波佐間逸博訳 新曜社

日曜日の夕方、研

究室。生ぬるい部屋

で扇風機がカタカタ

と音を立てながら首

を振る。わたしはふとこの本に手を伸ばした。

本書は人類学者ナラヤンによる、民族誌執筆の指南書だ。民族誌とは「人びとの暮らしをつぶさに記録し、洞察を深めていこうと試みている記述」である。読み進めると、心を躍らせてきた民族誌が、わたしの手から立ち上がってくるような気がした。書くという行為が自分の身体に馴染んでいく感覚だった。

著者の夫いわく本書は「ハウトゥー」ではなく「ハウアバウト」マニュアルだ。彼女は読者に自由記述の課題を出す。たとえば「いまこんな場所にいますか？」のように（書評の冒頭でこの問いに答えてみた）。こうした小さな問いから紡がれる記述のなかに、彼女は物語のはじまりを見出す。民族誌とはたゞ事実を積み重ねる作業ではない。そこにある出来事の背後に耳をすませ、言葉にならない感情や、関係のひだをすくい取る営みだ。場



所に漂う権力関係、自然の手触り、人の佇まいに宿る時間の層。ナラヤンは民族誌の一節を丹念に読み直し、その行間にひそむ声に耳をすませる。課題に応じて書きながら、わたしの視線もまた深まり、ひらかれていく。

副題に登場するチーホフは、医師として訪れたサハリンで見た流刑地の不条理を『サハリン島』に書き記した。ナラヤンはこの作品に民族誌的な視点を見出し、書くことを問いなおす。彼女の静かな語りには物語を立ち上げる力を伝えてくれる。その声に導かれて、あなたの言葉を探してほしい。（たいやき）

（二八八頁 税込三七四〇円 1月刊）

奴隷・骨・ブロンズ

脱植民地化の歴史学

井野瀬久美恵著

世界思想社



近年、「脱植民地化」が大きな話題になっている。被植民者が、宗主国の支配から解放されて政治・経済的独立を手に入れることを意味するこの言葉は、近年、植民者の銅像の引き倒しや文化遺物の宗主国から本国への返還などを通して、現実の政治にもグ

ローバルに影響を与えてきた。では歴史学において「脱植民地化」とは何なのか？ 本書では、大英帝国史研究で名高い著者が、イギリスとその旧植民地（西アフリカ）の関係史からこの問いに迫っていく。

例えば、一九世紀末のイギリス人旅行家メアリ・キングズリーの生涯。彼女はイギリス人女性で初めて西アフリカを訪れただけでなく、晩年、友人に宛てた手紙でイギリスの植民地支配を非難してもいた。この手紙が雑誌に掲載されると、それが今度はアフリカ人思想家エドワード・ブライデンの目に触れ、感銘を受けた彼はメアリに手紙を送っている。植民化批判は、本来交わることのない二つの大陸の人々に交流をもたらすものでもあったのだ。

あるいは、大英帝国博物館に収蔵されたブロンズ像。一九世紀に西アフリカのベニン王国の王宮で作られたこの像は、どのようにしてイギリスまで運ばれたのか。ベニン・ブロンズが植民地支配を経てイギリス人の手に渡った歴史と、昨今のイギリス国内での返還要求をめぐる経緯を相互に詳述することで、本書は、歴史学が「過去と現在との不断の対話」（E・H・カー）であることを強く意識させる。イギリス史だけでなく、歴史学の現代的意義に関心がある人にもおすすすめ。（倉井）

（二七二頁 税込二九七〇円 3月刊）

外国語独習法

大山祐亮著

講談社現代新書

「外国語独習とは、自己肯定感という燃料で飛ばす人力飛行機のようなもの」という著者は、本書で繰り返しその上手い取り扱いについて語る。説得力がある。なんといつてもこの著者は、実際に百以上の言語を学んだ経験を持ち、あの分厚い〈四週間〉シリーズ（大学書林）を四週間でやりきった経歴の持ち主だ。この偉大な経験者による独習の方法論は見逃せない。テキストの選び方から毎日の学習の始め方まで語る手厚い一冊である。

比較言語学を専門とする著者だが、本書において難しい専門用語はほとんどない。一方でその内容は、多言語を知り、言語そのものを研究対象とする専門家の知見に裏打ちされたものだ。文型優先型（英語など）か活用優先型（ラテン語など）か把握してから学習を始めよ、という指摘がその一例である。

外国語独習にはやめてしまふ以外の失敗は存在しない。何より語学ほど自分の成長を実感できるものはない、という著者。長い休暇を前に焚き付けられる。良い語学書と本書を手にした我々に怖いものはない？（ひるね）

（二三四頁 税込二〇二二円 4月刊）

自然に生きる

辰野勇著

角川新書

登山やキャンプなど、自然としっかり触れ合うものを趣味としている人は比較的多いのではないだろうか。私にはそういった趣味がなく、なぜあんな大変なことを趣味としてやるのだろうか、不思議に思っていました。

本書はモンペル創業者である著者が、自身の経験を交えながら自然との向き合い方を記した一冊。著者の人生には常に自然があったのだなと感じます。体力の問題で登山に参加できなかったショック、十六歳にしてアイガー北壁登頂を心に決め達成するチャレンジ精神、会社を立ち上げヒット商品を出し続けるものづくりの思想等々。自然と向き合うことの偉大な力を思い知ると同時に、それと縁遠い生活をしてきた後悔があふれてきました。

私は田舎暮らしではありませんが、《都会にも空があって、流れる雲もある。太陽の光を浴びることも、風の音を聞くことも、星空を眺めることもでき》る、と著者はいます。いきなり登山は少しハードルが高いですが、今夜は外に出て、ゆっくりに自然を感じてみようと思います。（竹輪）

（二〇八頁 税込二〇二二円 5月刊）

アメリカのいちばん長い戦争

生井英考著 集英社新書

本書は、二〇年続いたアフガン戦争ではなく、ヴェトナム戦争を起点にアメリカ現代史を通覧する試みだ。ヴェトナム戦争はいまの世界を作り出し続けている。しかし、それはこの戦争の記憶や教訓が今も生きているからではない。目を背け、抑圧することで手に負えなくなった傷跡だからだ。笑えない喜劇としてヴェトナムは繰り返され続けている。

進歩的なイメージの裏で行われた組織改革とそれが可能にした大規模派兵。「名誉ある和平」のための兵力の大幅増加。反戦運動を抑圧するため編り立てられた国内の対立。ヴェトナム戦争をめぐる本書の記述から固有名詞を消してみると、不気味なほどに普段のニュースに似通ってくるのがわかるだろう。

アメリカ現代史の具体的な記述に徹する姿は禁欲的とする言えるものだが、それだけの本ではない。本書のタイトルは元ネタである『日本のいちばん長い日』を我々に想起させることで、日本に住む我々もまた、歴史を繰り返しつつあることを静かに、しかし雄弁に告げているのだ。（コーク）

（二二八頁 税込二一〇〇円 5月刊）

建築の小説／小説の建築——国家と建築をめぐる二つの大長篇

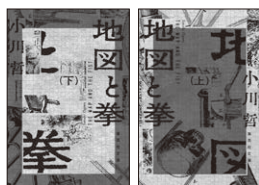
建築とは何か。近代建築の先駆者アドルフ・ロース曰く『我々が森の中を歩いていて、「……」フミッドの形に土が盛られたものに出会ったとする。我々はそれを見て襟を正す気持ちに襲われる。そして、我々の心の中に語りかけてくる。「ここに誰が葬られている」と。これが建築なのだ』。つまり、建築とは墓である。あるいは、過去を伝える碑である。人間の死後も、残るものである。

そこで思う。小説もまたそのような、建築にして碑ではないだろうか？ ましてやそれが大長篇ならば、小説は建築と同じように全体を支える柱を必要とする。作者は構造を計算し、材料を選ぶ。とりわけここに紹介する二つの小説は、そのようなアナロジーを思わせる、それ自体が建築であるような「建築」の小説である。

◆建築と暴力の記憶

先日文庫化された小川哲『地図と拳』（集英社文庫）は、満州を舞台に或る架空の都市の盛衰を語り上げた巨篇である。物語は冒険小説として読めるものの、全体を貫いている柱はあらゆる主題を建築とのアナロジーによって捉える思弁だろう。ここでは国家も建築の産物である。地図とは満州の設計図なのだ——『君は満州という白紙の地図に、日本人の夢を書き込む』。

けれどもそのように建築が理想を描き出す一方で、建築は過去を記す、とも作中では繰り返し語られる。そこに誰がどのような思いを懸け、いかなる文化と生活が営まれたのか、建築は記憶している。『建築とは



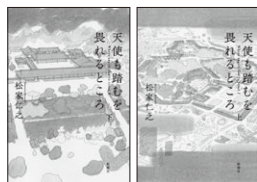
時間です』と主人公の建築士・須野明男は云つた。建築は時間を繋ぎ留める。その役目はだから『拳の記憶を、その時間を、永遠に保存し呼び覚ます』——すなわち、日本の戦争責任を記憶することにある。大陸に刻まれたその暴力の記憶こそ、本書のもうひとつの主題なのだ。

◆建築と空虚な象徴

それに較べると先ごろ刊行された松家仁之の最新作にして大長篇『天使も踏むを畏れるところ』（新潮社）は、戦争の記憶に言及してはいるものの、日本の戦争責任について、小川哲ほどの苛烈さはない。空襲によって失われた皇居を再建するというストーリーは、天皇という「象徴」を中心に据えながらも、どこか微温的だ。とはいえ

小説は、その象徴の空虚さにたびたび言及し、皇居のあるべき姿を模索する。本書で何より面白いのは、石をひとつひとつ積み上げるようなその丹念な筆致が、思想や理念ではどうにもならない建築の現実を克明に綴ってゆく点だろう。新宮殿建設には数多の人間の思惑が絡み、必然、建築は政治の場となる。あらゆる箇所衝突や破壊が生じながら、それでもなお落成してしまう新宮殿——そのありさまには、戦後日本の民主主義の姿が重なって見えてしまう。

そして、そのような空虚さをも記憶しながら、百年二百年と残り続けるのが建築なのだ。本書にある次の一節は、そんな建築の不朽性を記したうえで、小説もまたそうであると告げている——『いったん書かれたことは、完全に消え去ることはない』。（水炊き）



『第二の僕』が街を歩く——近代文学とドッペルゲンガー

誰か僕の眠っているうちに
そっと絞め殺してくるものはないか？

一九二七年七月二十四日、芥川龍之介は三十五年の人生に自らの手で幕を下ろした。例年にない暑さのためだという者もある。右に掲げた一節で終わり、作品全体に死の匂いがたちこめる遺稿「歯車」には薄気味の悪いモチーフが散乱しているが、なかでも目を惹くのが、こんな場面。

僕は久しぶりに鏡の前に立ち、まともに僕の影と向い合った。僕の影も勿論微笑していた。僕はこの影を見つめているうちに第二の僕のことを思い出した。第二の僕、——独逸（ドイツ）人の所謂（いわゆる）Doppelgängerは仕合せにも僕自身に見えたことはなかった。しかし亜米利加（アメリカ）の映画俳優になったK君の夫人は第二の僕を帝劇の廊下に見かけていた。（僕は突然K君の夫人に「先達（せんだ）って」はつい御挨拶もしませんで」と言われ、当惑したことを覚えてる）それからもう故人になった或隻脚の翻訳家もやはり銀座の或煙草屋に第二の僕を見かけていた。死は或は僕よりも第二の僕に来るのかも知れなかった。

芥川に限った話ではない。『第二の僕』はふらりと現れ、文学の世界を渡り歩く。「僕」に憎悪を向け（村上春樹「鏡」）、「殺される」という恐怖を与え（泉鏡花「星あかり」）妻を殺し（芥川龍之介「影」）、忽然と姿を消す（佐藤春夫「田園の憂鬱」）。彼らはいっ

たい何者なのか。渡邊正彦『近代文学の分身像』、山下武『20世紀日本怪異文学誌』、篠田知和基『世界分身神話』は、神出鬼没なドッペルゲンガーの足跡を追いかけている。

生霊や離魂病は昔から日本にも存在していたが、近代の分身は海の内からやってきた。ウィリアム・ウィルソン、ジキルとハイド、ゴリヤートキンの血を引く影たちに、映画の技術が輪郭を与えた。こうして、他人の目から見た自分——自分の知らない自分——その異和が、目の前で形をなす。分身は抑圧された欲望の化身だ。「反社会的欲望を抑圧・排除された欲望の鬼子」が、無意識の暗冥で成長し、宿命の四つ辻に立ちほだかる。

しかしそれだけではない。分身は「魂と肉体のスペア」、本身を守る身代わり（四字傍点）でもある。抑圧された欲望——自分の身を破滅に導く危険な欲望が、切り離されて出現する。そして本身に代わってその願いを成就し、危険を引き受ける。死神か、守護神か。芥川にとっての『第二の僕』はどちらだったのだろう。

もうひとつ。ドッペルゲンガーは都会を好む。「歯車」の草稿は当初「東京の夜」と題していた。大量生産・大量消費の時代に、行き交う人々は判別不能な群衆に溶ける。誰もが同じような服に身を包み、同じように仕事をこなし、同じような店に入り、同じような物を買う。自分が代替可能な存在であるという不安。

こんな暑い日に都会の喧騒を歩いていると、あなたも、自分とよく似た顔をした誰かがあなたに向かって微笑むのを見るかもしれない。

（くたくた）

編集後記

こんにちは。今年度から編集委員に参加させていただくことになりました、竹輪と申します。ちくわ……比較的低脂質で高たんぱくな食材ですが、塩分が多いので高血圧にご留意ください。納豆やバナナなど、カリウムを多く含む食べ物を一緒に食べることをおすすめします。

文章を書くという体験。思い返してみればエントリシートがほとんどでした。書いては直し、書いては直しの繰り返し。文を削ったり（あるいは引き延ばしたり）して、なんとか表現物として完成、ということにしたものです。このような作文は三百字や四百字程度のものですが、普段数式しか書かない私には大変な重労働でした。大袈裟に聞こえるかもしれませんが、そんな私からすると長い文章を書きあげるというのは一つの作品を創り上げることのように思えます……そんな世界に足を踏み入れたわけです。文字で表現することに対する私の見方は、これからどう変わっていくのでしょうか。そう考えると楽しみになってきました。

もう夏本番ですね。今まで以上に水分塩分補給は欠かせません。水を飲んで竹輪を食べてください。それでは、よろしく願いいたします。

（竹輪）

当てよう！ 図書カード

今月号の特集は、ズバリ語学書。学んだことのある言語から、普段中々目にすることも耳にすることもない言語についての話も出てきたのではないのでしょうか。そこで、言語に関連した問題を。世界で最も母語話者の多い言語は以下のうちどれでしょうか？

1. 英語
2. スペイン語
3. ヒンディー語
4. 中国語

（ブラチ）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは8月15日です。



《4月号の解答》 4月号の問題の正解は、2. のイルカでした。鯨偶蹄目ではなくフォークシンガーのほうのイルカさんです。実は彼女の『なごり雪』はカバー版で、元はフォークバンド・かぐや姫の楽曲でした。図書カードの当選者は、えび天天さん、はばさん、やまさん、いわさん、いぐあらしさんの5名です。当選おめでとうございます。

（水炊き）

読者からひびく

○春曲といえはなごり雪！

（理学研究科・えび天天）

——いま春が来てく君はく、名曲ですね『なごり雪』。描かれるのは雪景色ですけど、これが冬の曲では冷たすぎる。降るのはあくまで季節外れの雪——落うては融けてゆく、むしろ温かなほどの春の雪だからこそ、切ないわけですね。私事ですがこの歌は母のカラオケの十八番であり、子供の頃には子守唄代わりに聴かされました。そんな個人的な思い出が4月号のクイズには込められています。

○「新刊コーナー」が特集のように「違国日記」「戦争」「責任」「大量死」「相互関係」などのテーマでゆるやかにつながっていたのがとても興味深かったです。企画としてならとても面白いですが、意図せずこんなに関連しているならすごすぎます！

（防災研・ベニカナメモチ）

——丹念に読み込んでくださりありがとうございます。取り上げる本は示し合わせていないものの、それぞれの本がテーマとして繋がっている、誌面の割当てや配列には毎回こだわっております。そこに気づいていただけて、編集の甲斐もあるというものです。（水炊き）